

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26893132

研究課題名(和文) 認知症高齢者のための活動の質(QOA)評価法の開発

研究課題名(英文) Development of an Assessment of Quality of Activities (QOA) for the Elderly with Dementia

研究代表者

小川 真寛 (Ogawa, Masahiro)

京都大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：00732182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者施設においてレクリエーションや体操といった様々な活動が提供されている。しかし、認知症高齢者のような自らの活動を選ぶことや、その意義について表現できない対象者にとって、それらの活動が効果的であるかどうかは検証するすべがない。そこで、本研究では本人にとって活動を行った際の効果に関して観察から評価する項目が何かを調べることを目的に実施した。熟練作業療法士へのインタビューや郵送調査から、活動への取り組み方、感情表出、言語表出、社会交流や活動を通して得られたものといった観察項目が得られた。これらの視点は認知症高齢者のように自分の意思の主張ができない対象者の活動の選択や効果検討に有用と考える。

研究成果の概要(英文)：In facilities for the elderly some activities, such as recreation and gymnastics, are provided. However, there is no effective assessment for participants with dementia who can't select an activity and express their attitude toward their activity. Therefore, the purpose of this research was to clarify items to assess effects of activities by observation. From interview and postal survey on well-experienced occupational therapists, we found that observational items were "Engaging Activity", "Emotional expression during Activity", "Verbal expression during Activity", "Social Interaction through Activity", and "Something Obtained as Outcome of Activity".

研究分野：高齢期作業療法学

キーワード：認知症 QOL QOA 観察評価 高齢者 活動

## 1. 研究開始当初の背景

我が国の認知症をもつ高齢者の人口は400万人を超え、85歳以上の高齢者の4割が認知症をもつと言われている。そして長寿社会を迎えた今、認知症高齢者の尊厳やその人らしさを尊重したケアを推進していくことが提言されている。現状は、増え続ける認知症高齢者の対応のため、介護保険で運用される施設等でレクリエーションや体操、手工芸等様々なサービスが提供されている。しかし、それらの活動は漫然とマンネリ化して行われているものも多く、行っている対象者のその活動に伴う社会心理的満足度、つまり活動の実施により本人の活動参加へのニーズや意欲が満たされているかどうかという活動の質(Quality of Activities; QOA)を判断するような評価は見当たらなかった。

認知症高齢者は本人の満足感が得られる活動がもてず徘徊や無気力等のBPSD(行動心理症状)を呈することがある。認知症高齢者は自己表現が困難な者も少なくなく、本人の活動に関わる満足感を観察から判断しなければならない。このように認知症高齢者における活動に伴う主観的満足感、つまり活動の質(QOA)を調べるアセスメント方法は、本人にとって活動が有用であるかどうかの評価に必要であると考えた。

## 2. 研究の目的

上記理由により、観察から活動の質を評価できる指標は、認知症をもつ人の生活の質を向上させ、介護保険サービスの効果検討をする方法となりえると考えた。

したがって、本研究の目的は認知症高齢者のQOAを観察から評価できるツールのデザインを作り、評価法の開発ならびに初期的検討を行うこととした。この評価の開発は認知症高齢者の役割や活動による満足感が分かり、本指標は認知症高齢者の行動障害軽減への一つの援助方法の指標になる可能性もあ

り意義があると考えた。

## 3. 研究の方法

この目標を達成のため、研究1として臨床経験が10年以上ある作業療法士10名に対して、インタビューを実施した。質問内容は、認知症の診断をもつ患者に作業療法士として介入している際に、どのような活動時に、どのような患者の言動から、活動を行った際の効果があったと判断したかについてであった。結果を逐語録として、その中から研究疑問に合致する内容をコーディングし、類似したコードをまとめカテゴリー化するという質的帰納分析を実施した。結果として、得られた最終カテゴリーは「活動の取り組み」「活動中の感情表出」「活動中の言語表出」「活動中の他者関係」「活動の結果として得られたもの」という5つのカテゴリーとなり、その1つ会のカテゴリーである2次カテゴリーは19項目に求められた。

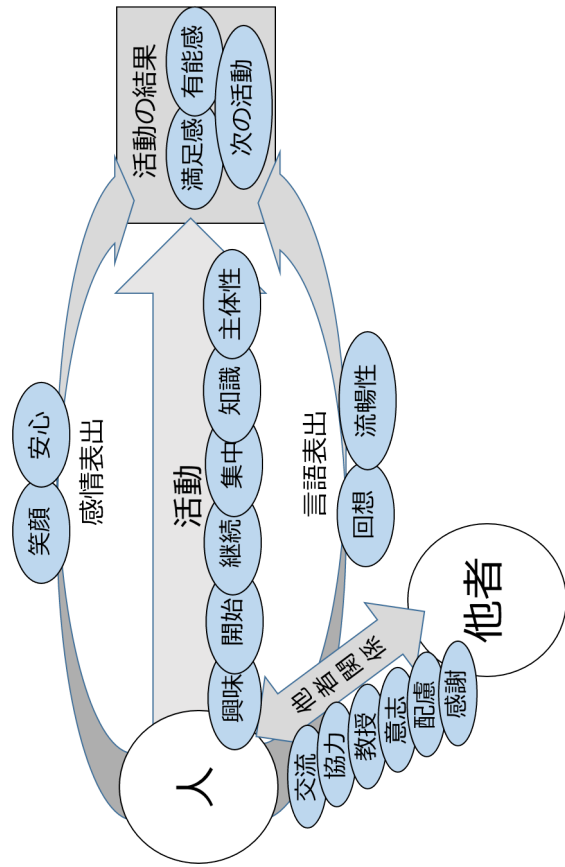
この結果の内容妥当性の検証のため、インタビューの結果を参照し19項目に定義と観察の具体例を挙げ、認知症をもつ対象者を専門とする作業療法士に対して郵送によるデルファイ法を用いて、項目の同意の程度を求めた。結果として、88名から回答が得られ、研究1から得られた19項目全てに対して75%以上の対象者から同意が得られた。この結果から、評価法の内容妥当性が得られたと判断した。しかし、調査の自由記載から項目の定義や観察の具体例に関して見直すべきコメントが得られたため、それらに対しては一部修正を実施した。

## 4. 研究成果

上記の2つの研究から得られた結果を表1にまとめて示す。また、研究結果の概念図を図1として示す。

表1 観察項目とその定義の一覧

大項目	観察項目	定義
活動の取り組み方	活動に注意を向ける。	活動に対して視線や発語、表情からそれに対して注意を向け、興味を示す。
	活動を始める。	活動に対する拒否がなく、何らかの活動を誘われて始めるか、自ら主体的に参加し始める。
	活動を継続して行う。	本人にとって適度な量の活動を継続して取り組む様子がある。活動の遂行に時間的な継続性が見られる。
	活動に集中して取り組む。	活動中に真剣な表情や無心さが観察され、活動に集中をしている。活動へ参加・関与する態度や状態が活動に入り込んでいる様子が伺える。
	活動に能動的变化を加えながら取り組む。	今の方法を変えてみたり、活動の内容・目標、活動中の役割を自ら設定したりといった活動中に新しいことをしたりする等、活動をよりよく遂行しようという取り組みへの発展的かつ能動的变化が見られる。
	活動に関する知識や技術が現れる。	過去に習得された知識や技術が言語や動作で自然にでてくる。
言語表出	回想する。	昔を回顧し、過去の思い出話をし、昔を懐かしむ様子が観察される。ネガティブな内容でなく、活動によりポジティブな内容が引き出される。
	発語が増える、あるいは発語量が増える。	自然と発語が見られる。ポジティブな内容の発話量が増える。言葉が流暢に出てくる。
感情の表	嬉しい様子が現れる。	嬉しそうなお表情や笑顔が見られる。
	安心した様子が見られる。	不安さや落ち着きのなさがなく、穏やかな表情で、リラックスした状態が観察される。
活動中の他者関係	他者との社会的交流を開始する。	視線を合わせる等他者に関心を向け、他者との社会的交流を開始する。
	他者と一緒に何かを行う。	他者ど場あるいは活動を共有し、協調して何かの活動に取り組む。
	他者に何かを教える。	他者に対して知識や技術を教えるという立場を取って、何かの活動に取り組む。
	他者に対して意思の主張や要求をする。	他者に対して、自分が思っていること、感じていることを表現できる。(ネガティブな感情表出や長期間要求が続く状態は除く。)
	他者を気遣う。	他者に対して配慮したり、何かをしてあげたり、気遣う様子が観察される。
他者に感謝を示す。	他者との関係の中で感謝を示す様子や発言がある。	
得られた通し	活動の結果として満足感を得る。	活動の結果や他者からの賞賛に対して満足を示すような表情や発言がある。
	活動の結果として自分の能力の確認をしたり、有能感を得たりする。	自己の能力を確認するような発言や自分の行った結果に対して有能感を示す表情や発言が聞かれる。
	活動が終わり、新しい活動を始めたり、次の活動の計画や期待をしたりする。	次の活動を楽しみにする様子や次の活動への計画をもつ、あるいは、続けて異なった活動を主体的に開始する。



本研究結果の概念図をまとめて以下に説明する。人は活動をする時に、まず「興味」を持ち、「開始」をし、そして「継続」、「集中」することで活動に没入する。その際に過去の「知識」や技術を用いたり、その中でやり方を試行錯誤したり、自ら目標設定をするという「主体性」が発揮される。そうした活動の際に「笑顔」や「安心」する様子という情緒面での感情表出や過去の「回想」をしたり、言葉の「流暢性」が向上し多くの発語が見られたりすることがある。一方、活動中に他者が関わる場合は、「交流」から始まり、「協力」し、時には「教授」や「意思」の要求、「配慮」や「感謝」することも見られる。このような活動が行われた結果、「満足感」「有能感」を感じ、「次の活動」への意欲が起これると考えられる。

この視点を参考にして認知症等で自分の意思を適切に主張できない対象者の活動の様子を観察することが、その対象者に適切な

活動が導入の仕方は適切か等，活動の選択や効果判断につながるのではないかと考える．

## 5．主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計2件)

小川真寛，澤田辰徳，内田達二，岡橋さやか，二木淑子：回復期リハビリテーション病棟入院中の重度認知症をもつ人への作業の獲得支援—プール活動レベル(PAL)を用いて—．作業療法，34(3)335-342，2015

小川真寛，内田達二，村田康子，澤田辰徳，岡橋さやか：重度認知症をもつ人へのプール活動レベルを用いた活動の遂行支援．認知症ケア事例ジャーナル，印刷中

### 〔学会発表〕(計4件)

Masahiro Ogawa, Seiji Nishida, Haruna Shirai: Developing observational assessment of occupational engagement—Analysis of interview of experienced OTs for people with dementia-. 3rd OTIPM Symposium, Seoul. 2015.5.30-31

小川真寛，西田征治，白井はる奈，岡橋さやか，二木淑子：認知症高齢者のための活動の質(QOA)評価法の開発に向けての予備的研究．第49回日本作業療法学会，神戸市，2015.6.19-21

Masahiro Ogawa, Seiji Nishida, Haruna Shirai, Okahashi Sayaka, Toshiko Futaki: What experienced occupational therapists observe when evaluating effects of activities in people with dementia. 6<sup>th</sup> APOTC, Rotorua. 2015.9.14-17

小川真寛，西田征治，白井はる奈：認知症をもつ人に対する作業による効果を

判断する観察視点—郵送調査による内容妥当性の検討—．第3回日本臨床作業療法学会，東京都大田区，2016.3.19-20

### 〔図書〕(計0件)

### 〔産業財産権〕 ○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

### ○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

### 〔その他〕 ホームページ等

## 6．研究組織 (1)研究代表者

小川真寛(OGAWA, Masahiro)  
京都大学・医学研究科・助教  
研究者番号：00732182